

生徒の自主性や自発性を妨げる部活という仕組み — 退部経験者の組織コミットメントの観点から¹ —

Extracurricular activities in Japan (*bukatsu*) that can discourage students' independence and spontaneity:
From a viewpoint of organizational commitment by students who dropped out of *bukatsu*

尾見 康博 廣瀬 文哉*
OMI Yasuhiro HIROSE Fumiya

要約：部活は日本独自の課外活動であり、本来は生徒の自主的、自発的な活動のほずであるが、それにはほど遠い現実がある。一度入部したら辞めにくいという現実にも、部活が生徒の自主性、自発性に基づいていないことが示されている。本研究では、退部したり、退部を思いとどまったりすることについて、組織コミットメントの観点からアプローチした。退部経験者3名に退部の背景や退部に至る過程について半構造化インタビューが実施された。その結果、所属する部活に対して情緒的コミットメントが弱まっても、規範的コミットメントが弱まらないと実際に退部することにつながりにくいことが明らかになった。また、部活の活動時間の長さが退部の主要因の一つと考えられ、部活への組織コミットメントを高める必要性とともに、時間的拘束の緩和が、生徒の自主的、自発的参加という部活本来の活動につながることを指摘した。

キーワード：部活，課外活動，組織コミットメント

I 問題

1 社会問題化された部活

大阪市立桜宮高校のバスケットボール部キャプテンが顧問教員からの度重なる体罰を原因として自ら命を絶った事件以降、部活動が抱える問題がさまざまな観点から取り上げられるようになった。体罰以外で注目すべき問題の一つとして、たとえば教員の過剰労働問題が挙げられる。この問題は、とりわけ中学校と高校の教員にとって、部活動の顧問としての負担が過剰労働につながっているということであるが、部活動がそもそも課外活動であることの意味を各教員や教育行政関係者にあらためて気づかせることになったともいえる（内田，2017ほか参照）。

部活動は課外活動であるからこそ、中学校と高校の学習指導要領においても「・・・特に、生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。（以下略：傍点は筆者による）」と記載されている。しかし、生徒の自主的、自発的な参加により行われている部活動はいったいどれだけあるだろうか。実際には、生徒の部活動参加を事実上義務づけている学校は非常に多く（スポーツ庁，2016）、「自主的、自発的」というにはほど遠い現状がある。むしろ、顧問や

¹本論文は、第二著者が本学教育人間科学部に2018年3月に提出した卒業論文「部活動における組織コミットメントと参加理由が退部意識に与える影響」の一部を加筆修正したものである。

* 東京都多摩市立南鶴牧小学校

先輩によって自主性や自発性は押さえつけられていることが多いであろう。

こうした現状をふまえるならば、学校教員の多くは、学習指導要領上の規定を建前としてすら認識していない、あるいはしよせん建前であるとして無視し続けているとしか思えない。そして、部活動は、生徒の自主的、自発的参加により行われ^{ない}ことが慣習化し、諸外国に例を見ない独自の課外活動として日本に定着しているといえる。

また、社会問題となっているのは部活動の中でも主として運動部であることもあり、教育学やスポーツ科学の間では「運動部活動」という名称がたびたび用いられている（中澤，2014ほか）。しかし、吹奏楽部を始め、文化部のなかにも運動部と同様の問題が指摘されるものもある（関，2017）。そこで Omi（2012）は、課外活動として単純に諸外国と比較することの困難さを指摘するとともに、英文で表記する際に“extracurricular activities”を用いずに“bukatsu”とした。本稿においても、部活動の中でもとくに競技性が高く、顧問の指導の問題が社会問題化されるようなものについては「部活」と表記することとする。

部活が生徒の自主的、自発的な参加によるものでないことは、一度入部した部をやめようとしてもやめにくいということからもわかる。悲惨な例として、ある高校の野球部員だった男子が、本人やその他の部員に対する副部長（教員）の度重なる体罰がいやで、監督（顧問）に退部したい旨を話したところ、「逃げちゃダメだ」と慰留され、結局退部できないまま、その数ヶ月後に自ら命を絶つ、という出来事があった（県立刈谷工業高校生自殺事案に関する第三者調査委員会，2014）。当然のことながら、慰留した教員に悪意はなかったとは思いますが、慰留の背景に退部に対する否定的な見方があったことは確かであろう。

なぜ退部はよくないと思われるのだろうか。

尾見（2019）によれば、部活をめぐる価値観の一つに「一途主義」があり、いったん入部したら最後（引退する日）まで継続すべきであるという信念が教員や保護者、生徒たちの間で共有されている。一つのことに集中させることは、たしかに教育的に大事な側面でもある。一つに決めさせずに自由にさせると、いろいろなことに目移りしてしまっ^て結局どれも身につかない、というのも一面の真実であるだろう。目移りしてどれもものにならないくらいなら、その時点で自分の好きな一つのことを選び、途中で少々しんどいことやつらいことがあってもへこたれずに継続し、それらを乗りこえて最後までやり遂げることは、本人にとって大きな財産になり、達成感を得ることにつながる、というのもまた一面の真実であろう。

しかしながら、物事に一途に取り組むことがすばらしいといっても限度がある。部活がいやになり精神的に追い詰められている若者に対して、それでもなお継続することを勧め、退部する意志を「逃げる」ことに見立てて事実上退部を認めないというのは、結果からいっても、（悪い意味での）一途主義のなせるわざだったといわざるをえない。

2 退部する理由、退部しない理由

青木（1990）によれば、高校生運動部員が退部したいと思う理由には「練習がハードで辛い」、「勉強との両立が困難」、「指導者とのあつれき」、「友人、先輩とのあつれき」、「帰宅時間が遅くなる」、「両親の反対」、「キャプテンの重圧に耐えられない」などが挙げられた。そして、退部を思いとどまる理由としては「友人（先輩）の存在と励まし」「途中でやめて後悔したくない」「そのスポーツ種目が好き」などが挙げられていた。また、「やめさせてくれず、いやいや活動している」、「言い出せない」など否定的、受苦的な意味合いの理由で部活を継続している生徒が存在していることも同時に明らかにした。

稲地・千駄（1992）は、中学生の運動部退部者を対象に主な退部理由を尋ね、活動の不活発化など

部活の重要な機能の低下に関する「部機能の低下」、仲のよい友人と別れることに対する不安に関する「交友分離不安」、長時間にわたる拘束に関する「拘束」、自分の考え方と部の方針のずれに関する「他の価値観」、部での活動が制限されてしまう程の病気、けがの経験に関する「病気・けが」、教科の学習への支障に関する「学習のおくれ」、活動の参加が技術の向上につながらないことに関する「技能向上の停滞」、部内での先生や指導者からのあつかいの不平等に関する「不平等」、部内でのレギュラー状態に関連する「非レギュラー」の9因子を抽出した。そして、その結果をもとに退部を予測するための部活動予測尺度を作成し、「部機能の低下」と「非レギュラー」の2因子が退部者と継続者を判別することを明らかにした。

植松・海老原(1993)は、中学生のスポーツ参加動機を7因子に分類したうえで、中学生運動部員が部活を「楽しくない」と感じているにもかかわらず参加を継続している理由は「自分を認めてもらいたい」、「両親や友達が望んでいる」といった社会的承認を獲得したいという欲求に基づいていることを明らかにした。

内田(2017)は、部活をやめさせない圧力として人間関係上のリスクが存在する可能性を示した。部活では、部員同士が土日も一緒に過ごすほどの濃密な日々が続くことで、部員同士の愛情や信頼を深めることができるが、同時にそこから逃げられない拘束を生み出すとしている。また、部活をやめさせない圧力として内申の影響もあるとしている。内申とは、入試業務で用いられる調査書あるいはそこに記載された点数のことを指し、内申書や内申点とも呼ばれる(以下では「内申」で統一する)。内田(2017)は、部活をやめることで内申に何らかの影響を与えるのではないかという不透明な不安が、生徒たちを部活に拘束していると指摘した。実際に、山崎・鈴木(2015)は高校生・大学生運動部における補欠選手が運動部に関わり続ける要因の一つとして、部活を続けていると就職・進学に有利で、やめると就職・進学に不利だ、といった社会的有用性が存在していることを明らかにしている。

以上のように、退部を思いとどまらせるものは、友人関係をはじめとした人間関係上のものや部活そのものへの執着といったものがあるが、いずれにおいても、前向きなものも後ろ向きなものもあることがわかる。後ろ向きというのは、やめたくてもやめられないというものであり、自主性、自発性の点から非常に問題と考えるべきである。

3 組織離脱としての退部と組織コミットメント

大西(2017)は、自身が指導者として経験した中学校吹奏楽部と大学生マーチングバンド部での出来事を中心に、部活の経営についての具体的な対応策や指導法を考察し、部活の種類や校種、人数等で経営、組織づくりが大きく異なることを示した。しかし、部活は子どもたちの活動を中心に置き指導者が独裁的になってはいけなると示されつつも、実際の実践では、過剰な練習量、規範づくり、役割分担等が行われており、部活から逃げられないような組織づくりが行われていたと捉えることができる(大西, 2017)。これをふまえるなら、部活の組織としてのあり方が退部の抑制に影響を与えているとも考えられる。退部を組織からの離脱という視点で捉えた時に重要だと考えられるのが組織コミットメントである。

Becker(1960)によると、多くの労働者は、今の職場を離れることになると、今その職場にいてことで得ているものや、今まで投資したもの、そして新たな職場を選択した時に背負うこととなる負担等を考慮するために、今の職場を選択し、結局同じ会社で働き続けるという。これらはサイドベット理論と呼ばれ、組織コミットメント研究に大きな影響を与えた。しかし、人が組織に所属するのはサイドベットのような功利的な側面だけではなく、その組織に対する愛着のような情緒的な側面も存在する。

Mowday, Steers and Porter (1979) は、組織コミットメントを「組織の価値や目標の共有、組織の代表として努力したいという意欲、組織に残りたいという願望などによって特徴づけられる、組織への情緒的な愛着」と定義し、組織コミットメントの測定尺度として15項目で構成されるOCQ (Organizational Commitment Questionnaire) を開発した。このOCQは組織コミットメントの測定尺度として現在でも広く用いられている。しかし、O'Reilly and Chatman (1986) は、「組織のために努力する意欲」や「組織に残りたいという願望」はコミットメントの結果であるとしている。また高木 (1997) も、組織コミットメントの定義の中に情緒的要素しか含めないのは多少問題があるとしている。

そのようななかで、組織コミットメントを3つの要素から構成されているとするAllen and Meyer (1990) が注目されてきた。3つの要素とは、組織に対する感情面でのつながりを現す「情緒的コミットメント」、組織を辞める際のコストの知覚によるつながりを現す「存続的コミットメント」、理屈抜きに組織には忠誠すべきだという内在化された規範によるつながりを現す「規範的コミットメント」である。高橋 (1997) は、Allen and Meyer (1990) の組織コミットメント尺度の日本語版を用いて、その弁別的妥当性を検証した。その結果、構成する項目が多少異なっているものの、やはり3次元で構成されていることを示した。しかし、高木・石田・益田 (1997) は日本の労働者の組織コミットメントは組織への愛着に関連した「愛着要素」、組織との一体感に関連した「内在化要素」、理屈抜きで帰属すべきといった「規範的要素」、ほかに選択肢がないといった「存続的要素」の4因子から構成されていることを明らかにしており、Allen and Meyer (1990) で示された情緒的コミットメントは愛着要素と内在化要素の2因子に分かれるとした。高木 (2003) は様々な職種の会社7社を対象に、組織コミットメントの先行要因について、そして結果としてどのような行動をもたらすのかについて検討した結果、同僚との人間関係が愛着要素に正の影響、存続的要素に負の影響を及ぼし、上司との人間関係は内在化要素、愛着要素に正の影響を与えることを明らかにした。また、内在化要素は積極的な発言、勤勉さ、行事への参加、同僚への配慮を促進するのに対し、愛着要素はいずれの行動にも影響を及ぼさないことを明らかにした。このことから、情緒的コミットメントを内在化要素と愛着要素に分けてとらえることの有効性を示唆している。また、組織コミットメントの及ぼす影響に関して、難波・矢嶋・二宮・高井 (2009) は公立病院、私立病院に勤める看護師の情緒的コミットメントと存続的コミットメントが低いほど離職意向が強くなることを明らかにした。しかし、規範的コミットメントは離職意向との関連が見られなかった。

また、近年では職場組織とは異なる組織への組織コミットメントも検討されている。北村・松本・國本・仲野 (2005) はスポーツ・ボランティア集団の組織コミットメントを、OCQを用いて測定している。橋本・唐沢・磯崎 (2010) は、大学生のサークル集団のような「準組織的集団」におけるコミットメント・モデルを作成し、情緒的コミットメント、規範的コミットメント、集団同一視コミットメントの3因子で構成されていることを見出し、それぞれのコミットメントの規定要因を明らかにした。

しかし、中学生や高校生の部活を対象とした組織コミットメントの研究は現状では見かけられない。そこで本研究では、退部に踏み切ることになった理由とその背景について、主として組織コミットメントの観点から考察する。

II 方法

調査対象者 大学生3名。

手続き 回答者の属性（氏名、所属学部、学年、中学・高校時代に所属していた部活）を回答用紙

て。それが一番心残りです。

H：それは何月くらいに？

A：それも、まさに10、11月くらいです。

H：レギュラーを取れそうだったのに、やめざるを得ないっていうのが一番心残りだったわけだね。

A：はい、そうですね。

H：他にもなんかあった？そんな心残りになるような…。

A：あとは、部活のメンバーとかが、結構仲が良くなっていたので、あまり関わりが少なくなるのが嫌だなって。メンバーと一緒にサッカーしたいなっていうのがあって、あとは単純にサッカーができなくなる心残りがでかいですね。

6) 中学生時代の部活との違い

中学生時代には、退部したという経験はなく、退部したいと思った経験もなかった。通っていた中学校では、帰宅部がなく学力が部活に影響を及ぼすようなことはなかった。それに対して、「高校は勉強しに行くところ」であり、勉強を一番に優先すべきだと考えていた。

B：水泳部（男）

1) 入部した理由

中学生から続けていた部活を「なりゆき」で継続した。

2) 退部を初めて意識したきっかけ

一年生の夏休み頃に水泳部の過剰な練習量から体調を崩すようになってしまった。そのことに対する理解が周囲から得られず、部活を休むことをとがめられていた。以下この質問に対する具体的な発話である。

H：退部を意識したのは何月頃ですか？

B：そうですね夏入って、夏休みごろ…。

H：一年生の？

B：はい、夏休み入ったあたりに、僕もともと体調があまりよくない人で、中学時代は午前中だけだったり、午後だけだったりしたんですけど、高校入ってからは、一日中やるようになってきて、体調管理が間に合わなくなってきて、崩して休みがちになったところで、先輩から「休みな休みな」って言われて、こっちは休まないといこれ以上やっていけないというのをわかっていて休んでいるんですけど、そういうのを経験したことない人が大多数で。

H：今、書いてくれた紙をちらっと見たんですけど、休日に10時間練習してたの？

B：そうですね、中学でも長くて午後の1時から5時まで4時間やって、そこからスイミングで2時間泳ぐ位だったんですけど、そこから体調を崩しやすくなって行って、そのスイミングも休みがちになったんですけど（中略）。

H：他にも退部を意識したきっかけってありました？

B：そうですね、中学から一緒の人が、何人かいたんですけど、同級生、先輩、結構いたんですけど、そのうち一個上の先輩がそんなにいい人じゃなくて…。

3) 退部したいと感じた時に誰かに相談したか

先輩の中でも仲のよい先輩がおり、その人に状況を改善してもらえないかどうか相談した。また、親にはけがや病気を理由にやめたいと相談していた。顧問の先生には「向こう（先輩たち）の肩を

に記入してもらった後、第二著者による半構造化インタビューが実施された。主たる質問の内容は以下の6点であった。インタビューの時間は15分から20分程度であった。

- 1) 部活に入部した理由
- 2) 退部を初めて意識したきっかけ
- 3) 退部したいと感じた時に誰かに相談したか
- 4) 退部を決心した理由
- 5) 退部に至っての心残りやなかなか退部を決心できなかった理由
- 6) 中学生時代の部活との違い

調査時期 2017年11月から12月。

III 結果

6つの質問に対する回答を、3人(A, B, C)の回答者ごとにまとめた。3人とも高校時代に退部を経験していた。回答内容がやや複雑な箇所など各回答者における特徴的な回答については、実際のインタビューのやりとりを適宜挿入する。

A: サッカー部 (男)

- 1) 入部した理由

「小学校の頃から地元のサッカーチームに所属して」おり、中学でもサッカー部であった。「単純にサッカーがやりたい」、「サッカーが好きだった」という理由でサッカー部に入部した。

- 2) 退部を初めて意識したきっかけ

「高校の制度で、10月まで一年生は全員何らかの部活に強制参加」であった。しかし、家族から、部活よりも「勉強優先だから学力が落ちたら部活を続けさせられない」と言われていたため、4月の段階から自分の学力次第で退部しなければならないと感じていた。

- 3) 退部したいと感じた時に誰かに相談したか

友人、担任・顧問等、学校の頼れる人ほぼ全員に相談していた。「周りの仲の良い友だちとかには、そういうことは愚痴みたいに話していて、あとは担任とか、あと顧問ですね、顧問にもこういうことがあってやめなきゃいけないんですけどあってあって、で、まあやめるかやめないかの間際には、ちょうど面談があったりして、担任とそういうとこで話して」いた。

- 4) 退部を決心した理由

11月頃に行われたテストの結果を受けて退部を決心した。

- 5) 退部に至っての心残りやなかなか退部を決心できなかった理由

自らの意思で退部したというよりは、学力が及ばず退部せざるを得なかったという状況から多く心残りがあるようだった。逆に退部したいとは思っていなかったため退部を決心できなかった理由は存在しなかった。以下、この質問に関する具体的な発話である。

H (第二著者; 以下同様): では、その退部に至って、心残りになることとか。

A: 心残りしかないんですけど。

H: そうだね、いくつでもお願いします。

A: 一番強かったのは、ちょうどその時に先輩たちが主体のチームにちょっと試合に出させてもらえるようになり始めたくらいで、このままやっていたらもうちょっとで試合に出れたのかなって、せっかく試合に出させてもらえるようになったくらいなのに、やめちゃうのはもったいないなあっ

持つことが多かった」ことから相談はしていなかった。

4) 退部を決心した理由

部活中に立ち眩みが生じるようになった。それでも先輩たちから休むことに対して厳しく言われていた。具体的には、LINEやメールで「休むのはなしたぞ。」「休んだら倍泳がすぞ。」と言われていた。また、事故で手首を骨折したこともあり、退部を決心した。

5) 退部に至っての心残りやなかなか退部を決心できなかった理由

第一に、「ウォーターボーイズ」と呼ばれるシンクロナイズドスイミングをやっており、そのペアのメンバーや仲のよかった先輩、同級生に対する申し訳なさがあったこと、第二に、水泳自体が好きであったこと、第三に、自分なりに冬までは頑張ってみようと思っていたことがあげられた。

6) 中学生時代の部活との違い

中学生時代にも水泳部に所属しており、退部を意識したことはあった。中学生時代には退部しなかったのに対し、高校生時代では退部したことの違いを尋ねたところ、中学生時代に退部したいと思った理由は、高校の水泳部でも一緒だった「1個上の先輩」の存在が一番の理由であった。しかし、練習の厳しさ、体調面での問題がなかったため継続することができた。

C: 吹奏楽部 (女)

1) 入部した理由

中学校でも吹奏楽部に所属しており、「続けるか悩んだけど、他にやりたいことも見つからなかった」から。

2) 退部を初めて意識したきっかけ

2年生の春に仲のよかった先輩が引退してしまったこと、顧問の先生が変わってしまい、その先生があまり好きになれなかったことなどから明確な原因はないがなんとなく嫌になってしまった。

3) 退部したいと感じた時に誰かに相談したか

クラスの友達には、「ちょっと今(部活を)やめたいかもしれない。」と相談し、同学年の部長には、「部活がちょっと嫌で行きたくないんだ。」と相談した。

4) 退部を決心した理由

先輩がいなくなってしまうことや顧問の先生が変わって、その先生と気が合わなかったこと、周囲に対する劣等感を感じてしまったことなどから、楽しさを感じなくなってしまったことを挙げている。以下、質問に対する具体的な発話である。

H: 部活の退部を決心した理由は? その時期は?

C: 理由は難しいんだよな。いやでも、多分いろいろあって、本当にざっくりいうと楽しくなくなっただけというのが一番なんだけど、なんで楽しくなくなったかっていうとさっき言ったみたいに、先輩がいなくなっちゃったりとか、顧問の先生が変わって、その先生と気が合わなかったりとか。あと自分よりうまい人がいっぱいいて、劣等感じゃないけど、私ここにいていいのかな、みたいな申し訳なさがね。私は中学から始めたんだけど、小学校からやっている子が、高校になるといたりして、中学の時ってみんな同じ地区じゃん、だから中学からやる人が全員だったんだけど、(高校では)小学校からやっているとか、ちっちゃい頃から楽器をやっている子がいたから、そういうこと一緒に練習するのはね、劣等感がね。

H: 吹奏楽部はより団体での力が必要だからね、劣等感はより感じちゃうかもね。

C: 運動部だと、できない人はレギュラーになれないからいいじゃん、でも吹奏楽はできない人も一緒にさ、同じ舞台上で立ちちゃうからさ、なんか。(中略) やめるって言ったのはね、二年の秋だった

かな。

5) 退部に至っての心残りやなかなか退部を決心できなかった理由

やめたいと思ってからなかなか退部に至らなかった理由は、「秋のコンクールは出よう。」と考えていたこと。また、吹奏楽部は最後に定期公演があり、後輩からプレゼントをもらったり、「最後までお疲れさまです。」という労いの言葉をかけてもらったりといった感動のステージでの引退に憧れを感じており、できるだけ引退まで頑張ってみようと思っていたことが挙げられた。

6) 中学生時代の部活との違い

中学生時代にも吹奏楽部に所属しており、退部を意識したこともあった。中学生時代には退部に至らなかったのに対し、高校生時代では退部に至った違いを尋ねた。中学生時代には顧問の先生の厳しさや部活の日数の多さから「もっと、部活が少なかったら遊べたりするのにな。」と思い、退部したいと感じていた。しかし、副部長として部の中心にいたことから劣等感を感じていなかったこと、そして、楽しさを見いだせていたことから中学時代は退部に至らなかった。

IV 考察

退部への過程と組織コミットメント

Aは、退部したくなかったのにもかかわらず、学業成績が芳しくなかったため、退部せざるをえなかった。しかも保護者の指示である。この背景には、部活に割く時間があまりに長いというのもありそうである。つまり、この保護者でも週に2、3回程度の練習で、夏休みもほとんど練習がなければ、やめさせることにはならなかったのではないだろうか。

Bもやはり、やめたいわけではなかったにもかかわらず、退部せざるを得なかった例である。体調を理由に練習を休むことを先輩の一部が認めなかったことが大きく、顧問は積極的には動かず、事実上その先輩たちの意見を黙認した。BもAと同様、練習時間が短かったら、あるいは個人に合わせた練習が認められていたら退部しなかったであろう。

Cは、先輩の引退や顧問の交代により楽しくなくなったという理由で退部に至った。部活を楽しむには特定のスポーツや音楽そのものが楽しいかどうかということだけでなく、周囲の人間が大きな影響力を持ちうるということを示している。

このように、退部の主要な理由は3人それぞれであり、実に多様であった。退部するかどうかについて、3人とも友人などに相談していたが、仲間とともに活動することに後ろ髪を引かれる思いはあっても、強く慰留されることはなかったために退部に至ったものと考えられる。

また、Aは自分の意志による退部ではなかったため、退部直前まで情緒的コミットメントが強くあったように思えるが、自らの意志でやめようとしていたBとCにとって退部することの障壁になっていたのは、やめたときに罪悪感を感じるといった規範的コミットメントであった。もちろん、中学時代には退部しなかったBとCも、退部を考えはじめるまでは情緒的コミットメントも強く持っていただろうが、それが徐々に薄れていき、ギリギリの局面で規範的コミットメントも弱まったことがうかがえる。

こうしたことから、情緒的コミットメントがなくなれば、規範的コミットメントは何とか乗り越えられるのかもしれないが、逆に言えば、Aのような外的な要因（学業成績が悪かった場合に退部する約束をしていた）がなければ、規範的コミットメントだけでなく情緒的コミットメントも強い場合には退部することが困難になるのかもしれない。

活動時間の長さ

B, Cは中学校でも高校と同じ部活に所属しており、退部意識の経験があったが、中学時代は退部には至らなかった。Bは中学時代も先輩との関係によって退部を意識したが、高校と異なり練習量が過剰でなかったこと、それによる体調不良がなかったことから、退部に至らなかった。Cは、先生が厳しかったこと、活動日数が多く遊ぶ時間が無かったことを、退部を意識した理由として挙げていた。しかし、楽しさを見いだせていたこと、部の中心的人物であったことなどをから、中学時代は退部に至らなかった。つまり、Bの場合は、中学より練習量が過剰になることにより他の悪条件（先輩との関係）が目立つことになってしまい、Cの場合は、練習量は同様に多かったものの他の条件（楽しくなくなったことなど）が悪化することにより退部に至ってしまった。先述の通り、Aの保護者も部活の活動時間が短ければやめさせなかった可能性もあることから、活動時間の長さは退部につながる重要な要素であると考えられる。

入部時の擬似的な自発性

入部した理由を見ると、B, Cは「なりゆき」、「他にやることがなかった」というネガティブな理由が含まれており、入部の時点で部活への姿勢がそれほど前向きではなかったといえる。BやCの選択は自発的と言えなくもないものの、何が何でもこれをしたい、というものではない。そもそも「どれも選ばない」という選択肢が実質的に認められないことが多いことから、自発的な選択にはかなり遠いと考えべきだろう。

以上のことから、生徒が退部しないようにするためには、楽しいと感じられる組織づくりをすること、過剰な練習日数をはじめとした時間的拘束を緩和すること、そして、人間関係を豊かにしていき、部活へのコミットメントが高まるようにすることが重要だと考えられる。そして逆説的ではあるが、このことは生徒が退部しやすくすることにもつながると考えられ、生徒の自主的、自発的な判断にもとづく本来の部活がそこに生まれるのではないだろうか。ただし、退部を考えている生徒に対して、顧問や先輩、友人などが必要以上に組織コミットメント、とくに規範的コミットメントを求めることは当人を苦しめることにつながるので注意する必要があるだろう。

V 引用文献

- Allen, N.J. & Meyer, J.P. (1990). Organizational socialization tactics: A longitudinal analysis of links to newcomer's commitment and role orientation. *Academy of Management Journal*, 33, 847-858.
- 青木邦夫 (1990). 高校運動部員の退部を思いとどまる理由と部活動継続に影響する要因 体育の科学, 40(1), 65-70
- Becker, H.S. (1960). Notes on the concept of commitment. *American Journal of Sociology*, 66, 32-40.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年 (2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討 実験社会心理学研究, 50, 76-88
- 稲地裕昭・千駄忠至 (1992). 中学生の運動部活動における退部に関する研究：退部因子の抽出と退部予測尺度の作成 体育学研究, 37, 55-68.
- 県立刈谷工業高校生自殺事案に関する第三者調査委員会 (2014). 県立刈谷工業高校生の自殺事案に関する報告書 <http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/40948.pdf> (2018. 10. 1. アクセス)
- 北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士 (2005). スポーツ・ボランティアの組織コミットメント 体育学研究, 50, 37-57.

- Mowday, R.T., Steers, R.M., & Porter, L.W. (1979). The measurement of organizational commitment. *Journal of Vocational Behavior*, 14, 224-247.
- 中澤篤史 (2014). 運動部活動の戦後と現在 青弓社
- 難波峰子・矢嶋祐樹・二宮一枝・高井研一 (2009). 看護婦の組織・職務特性と組織コミットメントおよび離職意向の関連 日本保健科学学会誌, 12), 16-24.
- Omi, Y. (2012). Collectivistic individualism: Transcending a traditional opposition. *Culture and Psychology*, 18, 403-416.
- 尾見康博 (2019). 日本の部活 (bukatsu) : 文化と心理・行動を読み解く ちとせプレス (印刷中)
- 大西雅博 (2017). 部活動の経営に関する研究－社会性を高めるための組織作り－ 奈良学園大学紀要, 6, 61-70.
- O'Reilly, C. & Chatman, J. (1986). Organizational commitment and psychological attachment: The effects of compliance, identification, and internalization on prosocial behavior. *Journal of Applied Psychology*, 71, 492-499.
- 関朋昭 (2017). なぜ吹奏楽部は文化部なのか－運動部と文化部のダイコトミーに着目して－ 名寄市立大学紀要, 11, 7-16.
- スポーツ庁 (2016). 全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書
- 高木浩人 (2003). 多次元概念としての組織コミットメント 社会心理学研究, 18, 156-171.
- 高木浩人・石田正浩・益田圭 (1997). 実証的研究: 会社人間をめぐる要因構造 田尾雅夫 (編) 「会社人間」の研究: 組織コミットメントの理論と実際 京都大学学術出版会, pp. 266-296.
- 高木浩人 (1997). 組織コミットメントとは何か: 概念と方法 田尾雅夫 (編) 「会社人間」の研究: 組織コミットメントの理論と実際 京都大学学術出版会, pp. 14-39.
- 高橋弘司 (1997). 組織コミットメント尺度の項目特性とその応用可能性－3次元組織コミットメント尺度を用いて－ 経営行動科学, 11, 123-136.
- 内田良 (2017). ブラック部活動－子どもと先生の苦しみに向き合う－ 東洋館出版社
- 植松秀也・海老原修 (1993). 中学生にみられるスポーツ参加の動機に関する研究 日本体育学会第44回大会号, 151.
- 山崎駿・鈴木秀人 (2015). 高校生・大学生の運動継続に関する研究－補欠選手が運動部活動へ関わり続ける要因に焦点を当てて－ 東京学芸大学紀要 (芸術・スポーツ科学系), 67, 121-127.